

鶴屋南北全集

第八卷

鶴屋南北全集

第八卷

編集委員

郡司正勝

廣末保

浦山政雄

大久保忠国

藤尾真一

竹柴翹太郎

鶴屋南北全集 第八卷 (全十二卷)	一九七二年八月三十一日 第一版第一刷発行	定 価 四、五〇〇円	編 者 廣末 保 © 一九七二年	発 行 者 田川敬吾 発 行 所 株式会社三一書房 東京都千代田区神田駿河台二の九 電話〇三(二九九)三一一番 振替東京八四一六〇番 郵便番号 一〇一	印刷所 株式会社三陽社 製本所 株式会社鈴木製本所
---------------------------------	-----------------------------	-------------------	-------------------------	--	---

凡例

表記は、底本のままを原則としたが、読みやすくするために、次の諸点に手を加えた。

- 1、台帳では、セリフの冒頭や、ト書きの文中の人物を、俳優名で示すが、これらはすべて役名に改めた。
 - 2、役人替名は各幕ごとに付した。
 - 3、各段のセリフごとに行を改め、セリフの頭付け「一」は省略した。
 - 4、漢字の字体は現行の新字体を用いたが、正字・異体字などはなるべく底本の字体の再現につとめた。但し、あまりにも特殊な用字や草書体は次のごとく処理した。
- | | | | | |
|-----------|--------|-------------|-------|-----|
| 逢↓違 | 吳↓異 | 臺↓台 | 寫↓嶋 | 寄↓崎 |
| 忝↓松 | 細↓網 | 勒↓勤 | 宜↓宜 | 結↓結 |
| 鞞↓鼓 | 扣↓叩 | 釵↓劍 | 寂↓最 | 尻↓尻 |
| 磬↓裝 | 勢↓勢 | 棄↓奪 | 亦↓等 | 穢↓拔 |
| 沾↓迄 | 廣↓魔・摩 | 襦↓襦 | 桺↓柳 | |
| ひ・ゝ↓候 | 參↓參らせ候 | ゝ↓也 | ヒ↓被 | |
| ムリ升↓ござります | ふ↓より | 斗↓ばかり | | |
| べ↓しめ | と↓こと | ふ↓さま | び↓かしく | |
| 成↓なる | 是↓これ | 被成↓なさる | 此↓この | |
| 其↓その | 爰↓こゝ | 能↓よく | 斯↓かく | |
| 夫↓それ | タア↓タベ | 式ア・服ア↓式部・服部 | | |
- 5、仮名づかいは、すべて底本のままとしたが、平仮名の字体は現行のものに攻めた。また、助詞などに用いた片仮名のハ・ミ・ニなどは、平仮名に改めた。
 - 6、本文中のルビについては、底本の性格もあって統一しがたいので、

- 解説中にあげておいたそれぞれの凡例を参照されたい。
- 7、句読点ならびに清濁は、校訂者の見解によってこれを施し、また改め正した。
- 8、思い入れを表わす記号「○」や、反復記号は、底本のままとしたが、「々」は、漢字・平仮名・片仮名の場合に応じ、それぞれ「々」「々」「々」に改めた。
- 9、当字は底本のままとしたが、明らかな誤字は正し、脱字は（ ）を付して補い、衍字は削除した。
- 10、校訂者が意識的に補った場合、(意味不明・参考補足等)は、それぞれ記号を用いて、その旨明示した。
- 11、原本のままの場合はママと片仮名でルビを付した。
- 12、草双紙は平仮名で表記されたものがほとんどなので、適宜漢字をあてた。
- 13、虫食い・不明は、それぞれ□□とし、ムシ・フメイとした。

鶴屋南北全集 第八卷 目次

三賀莊曾我嶋台	7
敵討櫓太鼓	139
玉藻前御園公服	223
靈驗龜山鉾	357
成田山御手乃綱五郎	477
解 說（廣末 保）	529

校訂

三賀莊曾我嶋台……菊池明

敵討 櫓 太鼓……廣末保

玉藻前御園公服……廣末保

靈驗 龜 山 鉾

一幕目〱六幕目……廣末保

七幕目〱大詰……落合清彦

成田山御手乃綱五郎……落合清彦

錦絵（玉藻前御園公服）……日比谷図書館蔵

鶴屋南北全集 第八卷

三賀莊曾我嶋台

第一番目 三建目

鎌倉千葉屋舗の場
小袋坂の場

役人替名

若徒柳川文内
大藤内成景
乳母お紺
医者岡田正庵
小旦那伊之助
千葉家の家中出石宅左衛門
同 賤ヶ谷伴右衛門
若徒三上雲八
腰元なぎさ
源五兵衛女房小万
源五兵衛娘おゆき
小幡村の百姓太治兵衛
安達家の家中笹野権三

沢村 瀧兵衛
尾上 春五郎
中村 市五郎
坂東 國藏
市川 染五郎
市川 門三郎
浅尾 友藏
嵐 冠左衛門
瀬川 富三郎
中村 大吉
市川 門之助
市川 菊五郎
尾上 菊五郎

文内

清めのお手水へ。

千葉家の家中薩摩源五兵衛
若徒彌介
万寿君頼家公
梶原平三景時
原小治郎
榛谷四郎
千葉の奥方星の井
千葉悪五郎経景
工藤大坊丸祐友
近江小藤太成家
八幡三郎行氏
判人大磯屋伝三
出石千太郎
腰元二の宮
八百屋半兵衛
関 三十郎
嵐 冠十郎
山本 花里
尾上 仙藏
惣領 勘八
嵐 五智藏
市川 瀧之介
松本 錦吾
市川 鯉三郎
大谷 門藏
中村 十藏
坂東 善次
尾上 多見藏
市川 瀧三郎
尾上 菊五郎

本舞台、三間の間、[＊]瓦葺、漆膠板。下樋をしたる屋敷長屋、とびら付の出格子。これに簾をかけ、忍び返し黒板塀、この内に妙見大菩薩と書しのぼり、これより上み手に両扉の冠木門、この前に松飾り、但下座の方出遣入有り。舞台下の方に四斗櫓の手水桶、竹のふごにかけ手拭大分釣し、ここに文内、布子羽織一本さし、仲間の拵らへにて、台に腰をかけ、手水抄〔柄杓〕を持居る。塀の前に茶屋の出し台、長床几ならべ、若ひ衆の仕出し三四人、これに腰を掛け、たばこ、茶を吞で居る。茶屋の亭主、やつし前だれをかけ、茶をはこび居る。上の方に大藤内、古き麻上下、大小の形りの上へ、湯褌、烏帽子を冠り、札守りの入たる箱を持、片手に鈴をふり立て居る。都而鎌くら千葉家の門前、妙見縁日の模様。ロヤの仕出し大勢、捨てりふ宜しく、門の内と花道へ行きかふる、この見得、鳥追の唄、通り神楽にて暮明。

大藤 高間が原に神とゞまりまし／＼て。

*中田のはらひをよみ居る。

仕出 けふはとりわけ長閑で、妙見さまはおふきにお仕合でござりまするな。

仕出 さよふサ、おびただしし参詣でござります。

亭主 旦那方も沓ツ、お茶をめし上りませ。

ト丸ばんに茶わんを大分乗せてさし出す。

仕出 アイ／＼、しかし茶よりか、腹がよつぽどきたやま時雨。そろ／＼出かけませう。

仕出 わしらはこれから桜屋で、どれ、一ぱいのんで行ませふか。

ト銘々に茶代をおいて出かける。

亭主 マア、御ゆるりとなされませ。

トやはり通り神楽、鳥追ひの相方。通りぬけの仕出し左右へは入る。

三人も花道と下座へは入る。この仕出しに交り、門の内より、お紺、乳母木綿やつしにて、抱子をはだにおぶひ、片手に文箱を持、ぞふり下駄をはき出て来り、

お紺 そりや、おんもを御らん遊ばせ。このように賑やかでござります。

アレ／＼、あのよふにうつつい姉さんや、よい男がいくらも通りますよ。

大藤 どりや、店をかりて一ぶくいたそふか。

トせふぎにかけ、たばこをむ。

文内 ハイ／＼、お清め／＼、清めのお手水／＼。

トお紺、文内を見て、

お紺 ヲヤ、お前は笹野三太夫さまの御家来衆。

文内 ヲ、文内でござる。お紺どん、こなさま、在所からいつ戻らしやれた。

お紺 アイ／＼、よふ／＼きのふ戻つてさんじました。それといふのも、私が親父の大病、おひまをもらふて参るにも、このお子さんがお乳に

おこまり遊ばすゆへ、旦那さんからおあつかり申て、在所へ往てかんがく致しましたが、とう／＼親父も、病死致しましたわひな。

文内 やれ／＼、それはや気の毒な。さぞや力おとしであらふ。

お紺 何サ、年の事でござりますから、仕かたもござりませぬ。それはそふと、お前、おつな見せをお出しだね。

文内 イヤはや、わしがお旦那にも、不慮な事で、にわかに若旦那にも浪／＼のお身のうへ。定めしこなさまにも聞れたで有らふが、親旦那三太夫さまには、御用先にて不慮の横死。殊更、百両といふ金子をうばひ、殺害なしして立のきし、その曲者わ何ものとも、今もつてあひしれず、それ故権三さまには御ついほうのおみのうへ。

お紺 ほんにタベ権三さまにもお目に懸りましたが、それゆへちこのおやしきへ、懸り人におなりなさるとは、おいとしひ事でござりますわいな。

文内 イヤモウ、それに付いては文内めも、当時お部やの御厄界。けふは又おやしきうち妙見さまの初ツの縁日、このよふに御門前へ手水桶を出しまして、小遣ひ取りをいたすのも、*すなはち即、源五兵衛さまのお差図でござるて。

トこの内大藤内思ひ入れ有つて、

大藤 イヤ何、身どもはおしる人ではござらぬが、承ればなにやら不慮なおはなし、さぞかし御心労でござらふ。ア、この間よそ事にうけたまわつたが、武州の小幡村とやらで、安達の家*なご中笹野何某とやらいふさむらひ、聞討に横死との風聞。へエ、それがその元の御主人でござるか、やれやれ気のどく千万な。

文内 御推量下されませ。

お紺 おや／＼、わたしやかふしては居られぬ。雪の下まで御使に往のて有つたわいなア。

文内 ハア、雪の下は、どこへいかしやるのじや。
お紺 何さ、わたしどもの在所の近所へ、里にお出遊した、お雪さんと

いふおせうさんを、幸ひわたしがりけに、つれ立ち申したが、わたしやきのふすぐにおやしきへ戻り、おせうさんは里親の太治兵衛さんがおつれ申て、夕べ雪の下の宿屋へおつきなされた故、御新造さんの、コレ、おふみをもつて今おむかひにいかねばならぬわいな。

文内 ヲ、それは元日から御取込な事じやの。イヤ、わしも今朝、くらひからこれへ出たゆへ、まだ源五兵衛さまのお宅へ、御祝義にもあらぬ。この間にちよいといてこよふか。

お紺 サア、ちよつくり往て参りませふ。あれ程早ふ往てこひといふたにと、又御新造さまにはしかられてはなりませぬ。なア、おほうさん。文内 それ、あなた、これにお出でなされませ。

大藤 そんなら、往てござりませ。

お紺 どれ、お姉ひさんをおつれ申てさんじませふか。

ト通り神樂にて、お紺は花道、文内は門内へは入る。

大藤 これ、茶屋の御亭主、店はわしが氣をつけてしんぜるが、一寸この先の梁川迄、頼まれて下さるまいか。

亭主 アイ、かしこまりました。何の用でござりまするな。

大藤 イヤ、アノ、梁川に小藤太殿といふお侍がござるはづゆへ、成景が、千葉の門前にお待申ておるといふて下され。

亭主 アイ、心得ました。そんなら店をお頼み申ます。

大藤 ヲ、合点じや。早く往てござれ。

トやはり通り神樂にて、亭主花道へ走りは入る。引連ふて向ふより、

正庵、慈姑頭、着付、羽織、医者、拵らへにて、ふらそこを持、出てきたり、直にぶたひへきたり、

正庵 どりや、これで一ふくいたし参らふか。

トせうきへこしをかける。

大藤 これは岡田正庵老でござるか。

ト正庵、大藤内を見て、

正庵 ハア、どなたかとぞんじたら、その元は吉備の宮の神職、大藤内

どでござるな。

大藤 さやう、元は吉備宮の神職も、世の盛衰にせひなくも、かやうに落ぶれ所、方、今は漸々中臣の、秋をよんで脊戸門に、日がな一日たちあかしまするて。

正庵 それは何か、御心勞な義でござらふ。

ト大藤内、正庵こそはのふらそこを見て、

大藤 時に岡田氏、お手前が持て見へられたそのふらそこ、そりや何でござるな。

正庵 ヘエ、これでござるか、これはよんどころなふ外から頼れまして、製法いたした、あじな妙薬でござるて。

大藤 ハテ、あじな妙薬とは。

正庵 イエサ、これは雌雄の守宮の生血でござりまするて。

大藤 何、守宮の生血とな。

正庵 いかにも。定めしおき、及びもござらふが、この一薬を酒にひたして、男女が用るときは、色情をもよふしまして、心を通じます事いたつてふかく、和漢とも、これにうへこそ良薬わござらぬ。

大藤 すりや、そのうつわの一薬が、男女しきぜうをもよふす良薬とな。

正庵 さやうでござる。又はこの生血を墨へすり入、身体へ付けまするときは、きゆると申す事はござらぬ。しかし、たとへば夢になりとも、男女交合いたすときわ、たちまちその墨がきへうせします、ふしきなめうやくでござる。

大藤 イヤ、そふ聞ひては、この成景も、ちと用ひて見たい心も有るが、なんと少くばかりは御無心申す事は。

ト当りへ思ひ入れ。この内、うしろへ伊之助出懸り伺ひ居て、大藤内が傍に置し札箱の錢をそろ、引つかみ、袂へ入れる。これを大藤内見付、びつくりして、

ヤア、おのれ盗人か。

ト引つとらへよふとする。曲ばちになり、伊之助ふりきり、いっさん

に花道へにげては入る。

それ、どろぼうく。

ト大藤内うろたへ、やはり曲はちにて、伊之助があとを追ふて向ふへは入る。この内正庵は仏狼姿をだいに抱へ、うろくして、この跡を見送り、

正庵 ヤレく、ゆだんもすぎもなる事ではない。イヤ、定めし源五兵衛どのゝ内義には、待かねてゝ有ふ。ちつとも早く、どれ往て参らふか。

ト鳥追明、通、神樂になり、正庵門の内へは入る。直ぐに向ふより、宅左衛門、麻上下、大小、跡より伴右衛門、同じ麻上下大小の形りにて出来る。雲ハ、仲間の拵らへ持草履を持、つき出て来る、この跡よりなきさ、着流し、腰元よそ行の形りにて出て来る。跡より若イ衆の仲間老人、甲斐絹のふろしきづゝみを持、付添ひ出て来り、花道にて宅左 なんと伴右衛門どの、日のはじめとは申ながら、ひとしほ四方の春景色。取わけ鎮宅靈符の尊星、おびただしいけふの参詣。真事に北辰妙見の利益。なんと有難い事ではござらぬか。

伴右 いかさま宅左衛門どのの申さるゝ通り、殊更のどけき春のうらゝか。

トなきさを見て、

ヲ、見れば源五兵衛方の女中じやな。

雲ハ さやふでござります。最前も霧が岡で見かけましたが、源五兵衛さまの御内室、小万さまの御代参とおひ見へまする。

なき いかにも、旦那さまにはおかみの御用に付、小万さまのおつしやり付で、霧が岡への代参、只今戻りがけでござるわいな。

宅左 それわく、太儀で有つた。然らば賤ヶ谷氏。

伴右 サ、ござりませ。

トやはり右の鳴物にて、皆く、本舞台へ来り、

なき 左やふなら、わたくしはおさきへ。

トゆかふとする。

伴右 ア、こりやく、幸ひ、お身にチトたづねたい事が有るな。宅左衛門どの、その元にも、まゝこれにていつぶくお上りなされ。

宅左 しからは、ともかくも。

ト三人床几へこしをかける。

伴右 イヤ何、その方が内かたに居るゝ、アノ笹野樞三どのには、旧冬もとかく間ちがふて逢ひ申さんだが、かわる事もないか。どふじやく。

なき ハイ、ずいぶんおかわり遊ばす事もござりませず、ことさらあなたにはこれ迄日々の御仏参と有つて、今朝も早ふ、松葉ヶ谷へお出遊しましてござりまする。

宅左 イヤはや、樞三にも不慮の事にて、源五兵衛どの方の厄介。その元も御存の通り、一体あのものは安達家の藩中にござれど、ふとした縁にて身共が筆道の門弟ゆへ、外なりませず、はなはだ氣の毒に存ずるて。

伴右 さやふでござる。ときに、アノ樞三どのには、姉御がござるとかねく承り及んだが、定めしそこには存じおろふ。シテ、それはどふいたされたな。

なき 成程、その御姉御さまは、御幼少のおりから、町家へおさとにつかわされ、そのまゝ今はお千代さまといふて、浅草辺の、たしかに八百屋仁右衛門どのとか申す方へ、御養女におなりなされたとの事でござりまする。

宅左 何、浅草辺にて八尾屋仁右衛門とあれば、身どもがいぜんめしつかひしもの。今は町人となつて、その仁右衛門かたへ智入りいたし、八尾屋半兵衛と申すが、すりや女房の千代と申すは、樞三の姉で有つたか、ハテしらぬ事とて。

伴右 イヤ縁といふものはどこにどふいふつりはりが、イヤ、釣りはりと申せば、彼釣筆のでんじゆの義。アノ女子の小万どのへ、おしへ遣わされたが、どふいふ子細でござるな。

宅左 子細と申て別義わごしらぬ。小万どのと申、樞三が出精、双方ともにおとらぬ芸道。去りながら伝授の義は樞三へと存じたなれど、そのいぜんより身が門弟。女子ながらも先官なれば、せひにおよばずでんじゆはかれへゆずつてござる。

伴右 いかさま、小万どのには手跡といひ、器量は元より気前はよく、一家中にあのような代呂物しろものは又とはござるまひ。

雲八 そのはずでもござりませふか。いぜんは情を売つた勤の身、それしやのはてならまんざらな、野暮とちがつて粹の骨頂こてい、どこに宕はなツいふんはござりませぬ。

伴右 そのいふぶんのないしる物を、女房にもつた源五兵衛殿。あまつさへ式人しきどといふ子迄なしたる深ひ中、思ひわ思ひ廻すほど、あたうらやましひ。イヤサ、女ででんじゆをうけるとは、浦山しひ事でござる。それにつけてもチトたのみたい事が有る。御めん下され。

ト宅左衛門が前を通り、下の方へ来り、なぎさにむかひ、

外の事でもなひが、身ども、アノ樞三にひごろからさま／＼と○サ、その方へたのみといふは。

ト懷中より文を出し、

これをそもじ、内／＼、アノ樞三へ手わたしたいし、そこをどふかよひよふに。ナ、色よひへんじを、イヤサいろ／＼用事は、でんじゆの義を遣せば、よきに返事を、これたのむわ／＼。

トなぎさ、この文を一寸とつて見て、

なぎ ごんさま参る、御存じより○ このよふな御使わ、御めんなされて下さりませ。

ト文をなげ返す。伴右衛門取つて、

伴右 ハテ扱、なにも氣遣ひな事わなひは。

ト宅左衛門へ思ひ入有つて、

筆道の義を申つかわすに、その取次の出来ぬとは、ハア、聞へた、すりや身どもが取次はいたすなと、アノ源五兵衛どのがい／＼つけられた

か。

なぎ さやふではござりませぬ。

伴右 シテ、身どもが取次はなせいたさぬ。

なぎ ヲ、それ／＼、筆道のでんじゆの義とおつしやりますゆへ。

伴右 や。

ト思ひ入。

なぎ サア、この間、小万さまのおつしやりまするには、いつたんでんじゆわうけたなれど、女子の事ゆへ、小幡むらへ里につかわし置た、惣領の娘、アノお雪を呼び戻し、幸ひ浪人の樞三どのへ、ゆづりたひとおつしやりましたれば。

伴右 これ／＼、すりやなんといふ、アノ樞三を小万どのが養子にいたすと。

雲八 ア、イヤ、しかしアノ樞三さまには、養子の事は御不承知と申すうわさでござりまする。

伴右 そりやそのはづの事。アノ樞三にはいひかわした男が有る。

なぎ エ、。

伴右 その男は外でもない。すなわち源五兵衛どの衆道しゅどうぐるひ。たれしらぬものもなひに、それを今更簪にとるとは、小万どのの心底、通ちものも事による。イヤはや、あきれてものがいわれぬ。

宅左 ア、イヤ／＼、身どもこれにてうけたまわつたが、小万どのの心底、まつたく思慮なき事にもござるまひ。さつする所家中の手前、殿へ聞へを憚りて、親子のちなみをあひむすび候はゞ、義利ぎりにせまつておのづから、衆道の中をたつ道利。いさめ兼たる女のみさほ、こりやそふなけりや叶ふまひ。

トこのとき四つのたいこなる。

雲八 最早四ツのおたいこでござる。

宅左 身どもは直さま、御役所へあひつめるで有ふ。

伴右 拙者は只今お跡より。

なき さやふなら伴右衛門さま。

伴右 とはいへこの文。

なき エ。

宅左 アイヤ、しからは賤ヶ谷氏、後こく御意得ませふ。

ト歌になり、なきさ、あしやくして先にたち、宅左衛門跡より、雲八付て門の内へは入る。伴右衛門残りうつとりあと見をくり、

伴右 エ、コレ、幸ひあふたアノなきさ、アノ堅ぞうの出石めが、邪魔になつたばつかりに、とう／＼つんがしてしまふたか、よし／＼、このうへは源五兵衛とアノ樞三、武人が中をとおりにして、有る事な事アノ小万へ、さすればひろ格氣している事なれば、たちまちぐつととつてくるは。所を身どもがひじゆつをもつて。

ト思ひ入有り、

殊更いつぞや笹野三太夫を、中間の弥介がしとめしおりから、かれが奪ひし百兩の金子。もつともわづかの少金ながら、先その金子をもつて人をなづけ、そのうへ、千葉の家の重宝たる、天国の短刀、まつた空海よりでんじゆなしたる、月星の一軸、この二品をうばひとり、それをおとりに殿を押込、弟たる悪五郎どの、家督になせば、そのときこそは身どもは御家老。若衆は樞三、女房は小万、イヤ、こいつは。

ト手をうち、このとたんチョントきつけ。伴右衛門、口をおさへ、あたりへ思ひ入。この見得、曲だいにて、

返し

本舞台、三間の間、武重舞台。見付、茶壁。正面、更紗暖簾。上の方、一間、前側明窓。掛壁。横手、瓦燈口。これにたいこ張の障子。明立有り、この前通り、杵ぬぎ、鉢、前通の懸り、南の方四ツ目垣、槓をあしらひ、台付の振よき松の立木。下モに門を口。これに薩摩源五兵衛と印したる表札をうち、注連縄、かまより松をたて、札受の帳面、手札さし持、宜く千葉家中の体。ここに小万、女房の拵にて螢火鉢を

*
叩へ、秋田風呂にきびしやうをかけ、茶を拵て居る。こなたに正庵、以前の形にて、右の仏狼毫の蓑を、屠蘇のてうしへ仕込居る。武重舞台の喰積の三方、盃台に三ツ組の盃直し有る。兩人、この見得、秘唄、武重舞台、通り神楽にてこの道具留る。

正庵 サア／＼、かよふにいたし置ひてござれば、もはや用ひましてもよろしうござるて。

小万 これわ／＼生庵さま。なにかと、いかひおせわでござりました。サア／＼、お黄花が出来ましてござりまする。

ト茶碗へくみてさしだす。

正庵 イヤ／＼、おかまひ下さるな。ときに、この間も、あらましおはなしも承つわつたが、その元さまと申、源五兵衛さまにも、まだおわかひに、にわかに御養子をお急にわ、およびそふもないものでござります。

小万 さやふではござりまするが、この間もおはなし申たとふり、他方へあづけ置ました、わたくしが娘も、最早成長いたしました事なり、又おまへにも御存の通り、こちの内に居りますアノ樞三、さいわい似合の縁へんと存ます故、あの子を御養子にいたさふと、内／＼そうだんいたしましたところが、どふいふ事やら武人とも、つひに逢ふた事もなければ、たがいに不承知のよふにござりますれば、どふいたしたものであらふと、いろ／＼あんじまして、ふとおまへにもおはなし申したところが、それにはかふ／＼いふくすりがあると、おつしやつたゆへ、おりいつておたのみ申ましてござりまするが、さつそくおしつらひ下さりまして、おうれしうぞんじまする。

正庵 イヤモウ、お間に合へば、愚老もはなはだ重畳にござる。イヤ、さやふなら最早お暇いたすでござらふ。

小万 それはあまりおそう／＼でござる、わざと屠蘇なりとお祝ひ申ませふ。

正庵 今日はおあつけ申ませふ。愚老事も、殿の御用向に付ましてな、

明朝箱根の山中へ、菓草をたづねに参らねば相なりませぬ。それにいつて何角用事もござりまするて。

小万 それは御くろうにぞんじます。さやうなら近日、この方より、お札にさんじまするでござりませふ。

正庵 しからば、源五兵衛どのへもよろしう。

ト門口へ出る。

小万 さやふなら正庵さま、よふお出なされました。

ト通り神楽にて、正庵花道へは入る。小万思ひ入有つて、

それはそふとさつきに、アノおこんをむかひにやつたに、モウアノお雪をつれて戻りそふなものじゃが、それにつけてもこちらの人の、このほどのアノ身持、ア、とかく男といふものは、ゆだんのならぬ、世話のやけた物じやわいの。そりやモウ、わたしとても、今ではかふいふ身のうへなれど、いせんはいやしひ勤の身のうへ、殊更在所そだちといひ、とゝさまは八右衛門といふ農業者、縁でがな、源五兵衛どのとなれそめ、日ごとに通ふて下さんす、そのしんせつにほだされて、勤のうちに身重になり、ひとめをしのびよふと、産とそのまま、小幡とやらへ里にやつたるアノ小雪。そのうち夫婦になる迄の、くろふも今ではこちらの人、わすれさんすも男のならぬ。さりながら、アノ権三どのゝ衆道にまよひ、あけくれあの子の事ばかり。御家中のおもわくをも、いとひはしやんせぬ源五兵衛どの。わしがりんきもするよふに、いへばいふほどつるのと、聞入さんせぬと思ふから、いつその事、アノ権三どのをもらひうけ、娘のお雪と嫁合せなば、親子の義利にからまれて、ふつつり思ひ切らしやんすはしれた事。それにつけても武人とも、不得心わ、どふも合てんが○ ア、それもお雪に逢ふたうへは、又どふなりとなろふかひなア。

トまり唄に角兵衛獅々の鳴物になり、向ふより、おゆき、きぬやつし振袖衣裳の形にて、紅絹の眼掛を持出て来る。跡より太治兵衛、木綿やつし、脚絆おしよぼからげの形、田舎ものの拵らへにて、風呂

敷包を背負ひ出て、跡より、お紺、いせんの形にて、やはり抱子をおぶひ、これに付て出て来り、花道に留り、

太治 サア、お雪どの。源五兵衛さまのお宅へ来ましたぞや。これ、かならず内へもどらしやれても、きげんよふさつしやれや。しかしうみの親子の中は又格別、まんざらな事もござるまひかい。

ゆき そりやモウ、実のとゝさんや、母さまの手元へ戻る事は嬉しけれど、きけばわたしに、アノ智さんとやらを取らしやんすとの事。どふもそれがわたしや。

お紺 何のおまへ、そのよふな事をきなく、何であらふと早くお出なされませよ。

太治 それく、親御にも、さぞかしまちどふに、おもはつしやれてござりませふ。ちつともはやく、サ、ござりませ。

ゆき それじやといふて。

太治 ア、これわしたり。これく、おまへ先へ案内して下され。

お紺 さやふなら、わたくしが又、よいよふに申上ます。サア、お出なされませ。

トやはり右の鳴物にて、三人舞台へ来り、お紺門と口をあけて、御新造さま、サア、戻りましたわいなア。

トうちへは入る。

小万 ヲ、おこんか、大体まつていた事ではない。これく、おゆきをつれ「て」かや。

お紺 ハイく、おつれ申てさんじました。サア、はやふおは入りなされませ。

太治 さやふなら、おゆるしなされませ。

ト兩人、すてせりふにて、おゆきをむりにうちへつれては入る。

小万 これわく、太治兵衛どのよふこそ見へられました。

太治 ハイく、これははや、あなたにもおかわりもござりませず、おめでたふ。

トこの内小万、おゆきを見て、このせりふにかぶせて、

小万 これへ、おゆきかひの。サアへ、こちへ来や。これ、我身はどふしたもののじやぞひの。

トたち上り、おゆきを手をとり、

ヲ、我身は眼がわるいのかひの。そりやアいつからの事じや。當ぶんの事かひの。ヲ、この子とした事が、親の内へ来て、なにもえんりよする事はないぞや。

トこなたへつれて来る。おゆきもじへと手をつき、

ゆき 母さまには、おかわり遊ばす事もなふ、おうれしう存ますわひな。小万 ヲ、我身も思才で、わしもうれしいわひの。そふして母がそちに逢ひにゆきたのも、明ればモウおと(と)しになるぞや。これへ、お雪、マア一寸たつてみやいの。

ゆき アイへ。

トたちあがり思ひ入る。

小万 そふじやへ、ほんにあのときより、めつきりせいがのびてじやわいの。これへ、マアちやつとすわりやいの。

トこれにておゆきすわる。

ヲ、そふしてマア、見れば、髪もうつくしう、はやふ結やつたの。

太治 イエモウ、その髪も今朝ほど、つひちよこへと出来ました。

小万 これはマア、じぶんがらといひ、おまへには、おふきに御くらうでござんしたな。

トこの内、お紺、有合ふきびせふの茶をくみ、

お紺 サア、お茶壺ッおあがりなされませ。

ト兩人にさし出す。

太治 イヤへ、おかまひ下されますな。

お紺 申、御新造さまへ、ゆふも鳥渡おはなし申ました通り、私が在所から戻りかけに、太治兵衛さまのおうちへお寄り申まして、とやかふおつしやるお嬢さんを、いろへとおすめ申て、ゑひやらやつと

おつれ申て参りましたわひな。

太治 時に、旧冬はあなたから、(くわ)しひ御状でござりましたゆへ、さつそくこの御子へ、右のおもむきを咄しました所が、もつての外のよふす。そのみぎり、おへんじに申てあげませふと、なにがはや心得ませぬ事で、とんとわたくしも、合点が参りませぬが、あなたへたいしましても、心得ませぬ事で、どふかサ、わたくしどもがこの御子を、そまつにでもおそだて申ましたゆへ、そのよふなわがまゝな事も出来ましたよふで、はなはだおきのどくにぞんじまする。

小万 これおゆき、わしがいふ事よふきいてたも。こりやいまいでもしれた事じやが、我身は藁のうへからな、これにごさるアノ太治兵衛どのへ里につかわし、わしが手しほにはかけねども、現在血をわけし実の娘。モウ比合の嫁入りさかり。又、男の子は有るといふても、(まだ)東西。それゆへ、どふぞ相応なものと、思ふにさいわひ、きりやうといひ、手跡といひ、いいぶんないよひ殿御が有るほどに、わが身にめあわせ、ゆくへは、おつと源五兵衛どのへ跡式をもたつる相談そふなりさへすりや、ほかへ嫁入するところがふて、なんといふてもえんりよはなく、我身の為にもよひといふものじやぞや。しかし、年のいかぬじぶんには、アノとのごならではとサ、思ふ事もまゝ有るならひ。そりや、わしとても合点なれど、ぜひとアノ子をもらひうけ、養子にせねばならぬ義利。そのわけ合も今ここで、まさかそれぞと打明けて、サ、いふにいわれぬ事ゆへに、どふぞきわけて、男をもつてたも。や、ヲ、この子とした事が、なみだをこぼして、それへ、顔がだいなしになるわひの。

ト顔を拭ひてやる事など有つて、

ヲ、サアへ、モウよひへ。そふいふ事なら、さだめし親がひに、むりな事とおもやろふが、わがみのこゝろたつたひとつで、な、こちら夫婦はいふにおよばず、太治兵衛どのにも大てひのよろこび。三方四方の丸ふおさまる事じやといひ、第一わがみは、わしが手元に居